



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第42号(R5. 1. 11)

新専門委員長の決意表明 Part I

生徒会の新しい専門委員長が誕生しました。3回に分けて新役員の決意と抱負を掲載します。しっかり読んでください。

【 体育委員長 岩佐 結翔 さん 】

こんにちは、この度体育委員長になりました岩佐結翔です。私は体育委員長になってから大きな目標を立てました。それは、体育祭を大成功させることです。理由は、年に一度の大きな行事だし、クラスだけでなく他学年とも協力して行うので学校全体が一つとなって行われる唯一の行事だと思うからです。もちろん5分前行動の呼びかけや、ボール点検などの常時活動は当たり前以上に行っていきます。わからないこともあり、失敗することも多々あると思いますが、全力を尽くし最後まで責任を持って取り組んでいきます。一年間よろしくお願いします。



【 体育委員長 橋本 隆太郎 さん 】

こんにちは。体育委員長になりました橋本隆太郎です。これから一年間楽しい思い出となる学校生活にするために、体育祭を中心として積極的に声を出していき、目標に向かって全力で楽しむことができるように頑張ります。その他にも普段からボールの使い方について呼びかけていきたいと思います。昨年、ルールを守れず使用禁止になっていたこともありましたが、昼休みに楽しくボール遊びができるようにして、一度もボールが使用禁止にならないことを目標にして頑張ります。これから一年間よろしくお願いします。



【 生活委員長 高野 柚子 さん 】

私は生活委員長として仕事をしていくうえで、『自分磨き』をしていきたいです。えっ?自分磨きって?と感じる方もいると思います。私は、現在の自分より成長していくために『自分磨き』をしていきます。私が成長したいと考えていることは2つあります。1つ目は、先を見すえて行動するための洞察力です。この力をつけるために、周囲の状況を素早く把握し、日常的にも予測するクセをつけていきます。2つ目は、情報を分かりやすく伝えるための伝達力です。この力をつけていくためには、まず自分の中で情報を整理しておき、話の要点を明確にしたうえで相手に伝えることを心がけていきたいです。



【 生活委員長 石川 智温 さん 】

僕は、この度生活委員長に就任して「学校のために自分に何ができるだろう?」と考えました。そして、一番に思い浮かんだのは、時間を守る習慣づけをすることです。僕は、この「習慣」に大きな意味があると思います。行動が習慣化されるのは30日と言われています。30日も行動し続けるには「~を続けよう」という決意と努力が必要です。人は時間にルーズになりがちですが、毎日意識して行動することで、河東中生徒全員が時間を守り、規則正しい生活が送れると思います。生活委員長として、河東中をより過ごしやすい学校にするために、日々精進していきます。一年間よろしくお願いします。



福岡県人・緒方春朔はどうやってウィルスを封じたのか？

～ 天然痘（てんねんとう）ウィルスと闘った日本人の話 ～

「コロナはいつなくなるんだろう？」「コロナの特効薬はいつできるのかな？」「絶対に効くワクチンはないのか？」つい、思ってしまいます。現在、新型コロナウイルス禍第8波のただ中において、学校も感染防止に懸命です。感染の始まりから4年目を迎えていますが、未だに終息の見通しはたっていません。しかし、人類のウィルスとの闘いの歴史を振り返ると、やがて根絶への道が開かれると思います。

人類は、これまで人体を害する様々なウィルスと戦ってきました。地上には2万種類のウィルスが存在するともいわれ、人間は生涯200回ほど感染するそうです。そのうち、人類史上最も恐ろしかったのは天然痘（てんねんとう）ウィルスでしょう。古くは古代エジプトやメソポタミアでの感染記録が残されています。天然痘ウィルスの感染力はコロナの比ではなく、感染者の死亡率も20～50%と極めて高かったようです。日本でも、古くは奈良時代の文献に天災として書かれています。数年おきに流行を繰り返すのが千年以上も続きました。しかし、ワクチンや療法の開発により、1980年にWHO（世界保健機関）が根絶を宣言し、それ以来地球上の感染者はいなくなりました。

さて、この人類と天然痘ウィルスとの闘いは数千年にわたりましたが、この間世界中の膨大な数の医者や研究者が命を削って闘ってきました。天然痘撲滅で最も有名なのがイギリスのエドワード・ジェンナーです。ジェンナーは、18世紀の終わりに天然痘にかかった牛の膿（うみ）を人に接種すれば発病しないことを突き止めました。今でいう免疫療法・ワクチンの開発です。この方法は、世界中に広められました。その後、ワクチンや療法に改良が加えられ、ついに20世紀の終わりに地球上から絶滅させることに成功しました。

実は、ジェンナーよりも6年もはやくこのワクチンという方法を開発した日本人がいます。江戸時代の終わり、秋月藩の緒方春朔（おがたしゅんさく）という人です。福岡の人なのですが、福岡県人でさえこのことを知っている人が少ないのは残念です。天然痘は、江戸時代、周期的に日本を襲います。特に、子どもたちが多くかかり、8割の村人が亡くなったという記録も残っています。緒方春朔は、天然痘は一度かかると二度とかからないという事実に着目し、健康な人にごく軽い天然痘にかからせておいて、その後に天然の天然痘にかからないようにする方法を研究しました。ジェンナーは牛の膿を使いましたが、春朔は感染した人のかさぶたを使いました。それを粉にして、鼻から接種するのです。筑前秋月で天然痘の予防法、すなわちワクチンを試み日本で初めて成功しました。しかし、江戸時代の当時は天然痘の患者のかさぶたを取り、これを健康人の身体に入れ込むという医療行為はなかなか受け入れられものではありませんでした。

医者たちは危険と考え恐ろしくて誰も試みようとはしません。また、人由来のワクチンは、ジェンナーの牛由来のものと違って、本当に発病してしまうこともありワクチンの加減の難しさもありました。そのような医療行為を受けようとする者も、受けさせる者もない状況でした。そのため、せっかく春朔が開発したワクチン療法は生かされることはありませんでした。ただ、病気になった人を助ける治療医学も大切ですが、春朔がすすめようとした予防医学は先駆的なものとして価値があります。同じ福岡県人として誇りに思い、記憶しておきたい人物です。

天然痘の免疫療法を開発した日本人をもう一人紹介します。同じく江戸時代の福井藩の町医者で笠原良策という人がいます。彼は、ジェンナーと同じ牛由来のワクチンを利用して免疫をつくることで天然痘の流行を防いだ人です。彼の点として優れた点は、自分の開発した療法を公開したことです。現在なら当たり前のことですが、江戸時代は藩内の情報を他藩へ広げることがご法度でした。また、医学と言えども利益につながることは秘密にされていました。実際、幕末に天然痘の免疫療法に成功した人は、この二人の他に数名の資料が残されています。皆、新しい療法の秘密漏洩防止に必死だったわけです。一方、良策はグローバルな思考を持ち情報を公開して、多くの人命を救います。

いずれにしても二百年以上前に、地球レベルの感染症に対して、日本人が世界に先駆けて力強く立ち向かい撲滅へ向けて力を発揮したことを忘れるわけにはいきません。また、当時の日本の庶民の寺子屋の教育力や学問研究のすそ野の広さも世界一と言えます。現在のコロナ撲滅への研究は世界の後塵をはいしている感がありますが、日本の医療関係者の方々の日々の献身と尽力に敬意を表してやみません。そして、かつての天然痘やコレラ・ペストなどのように、コロナも人類が封じ込める日が一日もはやく来ることを祈りましょう。

（参考文献『雪の花』吉村昭著・新潮文庫）

